

# 太平洋の森から

2018年1月発行  
No. 39

## ポール・パボロさん来日報告特集

ポール・パボロさん来日ツアー報告  
ニューアイルランド島・ニューブリテン島現地報告  
現地最新情報



ポール・パボロさん（朝日新聞社・相場郁夫撮影）



辻垣正彦代表（ニコラ・バレでの講演会）



上智大学での講演会

# ポール・パボロさん来日報告

## ポール・パボロさんはなぜ日本に来たのか

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」代表 辻垣正彦

2017年6月24日20時、ポール・パボロさんは成田空港に到着した。

15日間にわたる過密な日本講演の旅が始まる。  
なぜ、彼ははるばる日本へ来ることになったのだろうか。  
彼は日本の市民へ何を訴えたかったのだろうか。



ポール・パボロさんはニューブリテン島南岸ポマタ地域にある人口350人の小さなムー村の出身。最愛の妻ジャネットと子どもたちと共におだやかに暮らしていた。

日本講演の切り出しは、

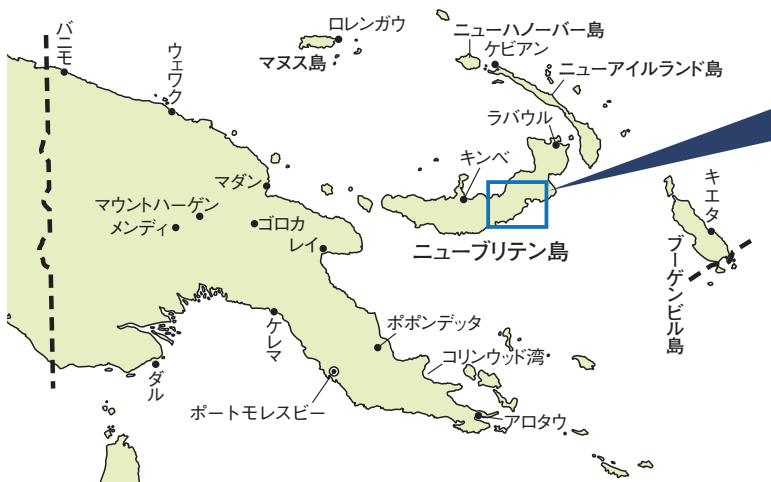
「私がこの場に立っているのは生活のすべてを与えてくれた森が、政府とマレーシアの大企業リンブナン・ヒジャウ社によって皆伐されたからである。2011年から2017年の6年間、私たちの目の前で伐採が行われ、大型木材運搬船が運び去っていった」

子どもから老人まで、男も女もあらゆる方法で「森を奪わないで」と抵抗したにもかかわらず、村の80%の森は皆伐された。あとにはむき出しの赤土と、広くて長い伐採道路と、20万苗のオイルパームがまるで畑のように等間隔で植えられてあった。子どもたちに何を残したらよいのか。皆伐された森は、100年では回復しない。じゃあ何を残すのか。抵抗した記憶と世界

に訴えて賛同を得、連帯することかもしれない。経済先進国は自国の目先の利益しか考えず、地球の未来はどこ吹く風である。森の民は森と手を取り合って生活しているのだ。ムー村だけでなく」

これまで彼は森を守りオルタナティブの収入を得るモデルケースとして活動し、友人と共にPOMIO POTOGNPAGA GROUPというNGOも立ち上げていた。

しかし政府と大伐採企業マレーシアのリンブナン・ヒジャウ社は、村民に知らせることなく不正な契約書のもと秘密の中にSABL（スペシャル・アグリカルチャー・ビジネス）を成立させ、ポマタ地区の99年間4万2400ヘクタールのリースをでっちあげた。村民の全く知らないうちに不正な契約書ができあがっていた







▲ポマタ地区ドリナ・キャンプ (2013年11月20日、辻垣撮影)

のだ。2011～2016年末の6年間、森は皆伐され、企業に雇われたポリスや私兵が村人を暴力で押さえ込み、見えざる傷、切り傷、あざを心と体にいやしがたく残したのだ。

「森のない生活は全く考えられない」と彼は言う。

「美しい環境と未来が破壊されていくのを黙って見ていることができない私たちは、生活をかけ、最善を尽くして、生命と暮らしの土台である森と大地を守るために闘いつづけている。そのために日本にも来たのだ」と。

新幹線もジェット機も、大きな船も西欧社会でいうお金もないが、盗まれ、強姦された彼らの土地を復活させるために、巨人な権力機構に立ち向かって彼らは素手で闘っているのだ。

今日、住友商事などの商社を通し、原木だけでなく、中国で加工された丸太を合板にし、その60%を輸入している日本。

「ム一村の森が合板になって日本の住宅産業を支えていること、またム一村の幼い子どもたちの心の傷のことを考えてほしい。

希望の灯が見えているわけではないけれど生命を掛けて訴えつづけてたい。

この小さな村で起こった事件を、ここから巨大な利益を得、振り向きもせず、力づくで奪っていった日本、

中国、マレーシア、オーストラリア、韓国などの経済ファーストの心ある市民に、この不正を訴えたい。ム一村の子どもたちのため、この地球の未来のため、心からの支援と支持を訴えたい」

「この森のキズからあふれ出た鮮血をあなたがたの生活を通して受けとめてください」と、訴え続けた日本での15日間であった。

五反田の我が事務局に5日間泊まっていたが、東京の空気がいかに汚れ息苦しかったか。しわにきざまれた精悍な顔の輝く眼から、はかりしれない痛みと悲しみを見た思いがする。

ポール・パボロさんの話を聴いた人々は、東京、藤沢、浜松、名古屋、大阪、岡山、広島と上智、立教、関西学院大学などの若き大学生と多様な人々であった。数は決して多くはない。しかし森の国から来た預言者ともいえるポールさんの訴えを人々に宣言する使者となるだろう。

支援と連携が広がり、破壊の連鎖がやみ、村々の森の樹々が再び喜びの声を上げることをこいねがいたい。

なお、到着しての翌朝、ポールさんの最初の講演は、藤沢の「聖心の布教姉妹会」本部で行われた。活発な質疑が行われ、多くの励ましと祈りと支援をいただいた。



東京五輪を控えた都心で相次ぐ高層ビル建設が、母国パプアニューギニアでの熱帯原生林の伐採につながって見えた。切り出された原木は主に合板に加工され、ビルの建設現場で使われるからだ。「快適さの追求のために、熱帯の森が奪われる実態を知って」。民間団体の招きで初来日し、大学などを回った。

ニューギニア本島で自動車部品の配送をしていたが、病で故郷の島に戻った。そこに現れたのがマレーシア系の伐採企業だった。

企業側は地元の有力者と組み、99年間の土地の賃貸契約を地主と結んだことになっていた。ところが台帳を調べて偽造がわかった。「99%の地主名が虚偽で、生後1



カ月の乳児の署名もあった」

先頭に立って抵抗した。3年前に裁判で「一時操業停止」を勝ち取ったが、実際に伐採が止まったのは昨年のこと。すでに6年で約40万本が切り出されていた。

故郷の森を守っても、国全体の原木の輸出は減らない。主な輸出先は日本から中国に代わったが、加工品の消費地は日本だ。

1男6女の父。5月に生まれた超未熟児の双子の画像を、携帯電話に保存して持ち歩く。

違法伐採は後を絶たず、温暖化を防ぐ国際社会の取り組みも鈍い。「森は命の源。消費地の次世代が環境を考えて暮らすことが、私らの希望になる」

文・山浦正敬 写真・相場郁朗

▲『朝日新聞』2017年7月8日「ひと欄」(文・山浦正則 写真・相場郁夫)



▲木材と油やし運搬船 (ポール・パボロ撮影、2017年)



# ポール・パボロさん来日ツアー 各地からの報告

6月25日 藤沢

## 到着翌日 カトリック藤沢教会 での講演

「パプアニューギニアとソロモン諸島の  
森を守る会」事務局長 倉川秀明

冒頭にGlobal Witnessという世界規模の自然保護団体が制作し、私たちの会が日本語訳を付けたドキュメンタリー・ビデオ短編を上映して、現地の森林の姿、森林を伐採している現場や闘っているポールさんたち村人の姿など緊迫した映像を紹介した(この動画は「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」の公式ホームページで見られる)。

ポールさんは、しっかりとした語り口で、そもそも森が自分たち村人や家族にとって、どんな意味がある

かを語った。自分たちは森の恵みの中で育ち生活をしてきた。森は豊かさや精神の糧なのだ。

しかし、マレーシアの伐採会社リンブナン・ヒジャウ社が2011年から森を皆伐し始めて、自分たちの生活が一変した。抵抗運動を始めた村人を会社に雇われた武装私兵たちが脅したり、暴力をふるう。道路封鎖をしたらポリスに逮捕された。こういう厳しい闘いの模様が生々しく語られた。

現在は裁判が進行中で状況が好転していると語り、ここにいる皆さんが私たちを支えてくれていることに感謝していると語って話を終えた。私たちの想像をはるかに超えるような困難な状況の中で、不屈の闘いを続けているポールさんの姿に接して、私たちは感動したのだった。

6月28日 東京

## 超満員の熱気の中で上智大学で レクチャー

上智大学・瀬本正之(神学部教授)  
吉川まみ(神学部講師)

2017年6月28日、上智大学6号館の大教室にスペシャルゲスト、ポール・パボロさんをお迎えし、300名近くの学生に向けて貴重なレクチャーをしていただきました。自由参加であったにもかかわらず、教室は超満員で、通路に座って参加する学生も出たほどです。学生たちは皆、熱心にパボロさんの話に耳を傾け、質疑応答ではパボロさんに直接通じるようにと英語で話しかける学生もいました。

参加学生の大部分が、環境問題についての科目を受講中の学生たちでした。日ごろの授業の中で学生たちは、教皇フランシスコが2015年に発表した環境問題についての公文書『回勅ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』を読んでいます。その中で、教皇フランシスコは、地球環境と人々の傷つきやすさには密接



▲藤沢での講演会



▲左から瀬本正之、学生、ポール・パボロ、辻垣、吉川まみ、清水

なつながりがあるのだと繰り返し説き、「消費が肥大する世界は、同時にあらゆる形態のいのちを虐待する世界なのです」(LS.230)と述べています。地球環境破壊の主要な原因がグローバル化した世界経済市場における「大量生産・大量消費・大量廃棄」の構造にあるということや、そのプロセスで人間の尊厳を傷つけるような資源収奪が行われるケースなど、学生たちは頭の中では理解しているはずでした。しかし、それがどのような形で行われているのか、多国籍企業がどのように現地にかかわっているのかなど、実際にパボロさんが伝えてくれたことは私たちの想像をはるかに超えるものでした。

パボロさんのレクチャーの後に提出された学生たちのコメントペーパーからは、現代社会の構造をいかに変えていけばよいのか、同時に、無意識のうちに消費者として大量生産の構造に参加する先進国の私たち自身がいかにかわるべきか、パボロさんたちやパプアニューギニアの自然を守るために何ができるのかを考えながら、さまざまな気づきを得たりする様子が伝わってきます。

6月29日 東京

## 立教大学での講演会

ゾンターク・ミラ (立教大学教授)

パプアニューギニアの最後の熱帯雨林を生命がけで守っている村人のリーダー、ポール・パボロ氏を2017年6月29日、立教大学に迎えることができ大変光栄に思います。パボロさんと共に、辻垣正彦氏と清水靖子氏もお見えになり、現地における国際企業による伐

採がもたらしている環境破壊、村などの社会構造の解体、そして抵抗者に対する残虐な暴力について、多くの情報を提示していただき、そして被害者側に立っているにもかかわらず、非常に温かい目と温調な声で聴衆に語るパボロ氏の貴重な証言を聞かせていただきました。

国と企業がSABL(スペシャル・アグリカルチャー・ビジネス・リース)プロジェクトの名のもとで村人から土地を奪い、村人の生活基盤をなくしているなかで、村を裏切る者もいると聞いて、このような裏切り者に対する人々の反応はどのようなものかと思いました。怒ってしまうのではないかと聞いたら、パボロ氏は、暴力をもって暴力と裏切りに応えないように呼びかけていると答えました。

また、聴衆の中からは、日本企業の直接的および間接的活動による被害が多い中、パボロ氏の日本人に対する思い、そして日本人への要望についての質問も出ました。日本人としてどのように日常生活においてパプアニューギニアの人々を支援し、その豊かな自然が守られるように努力できるかなどについてうかがいました。講演会の後に、奥さんが子どもを産んだばかりだとのお話を聞いて、パボロ氏が共同体のニーズを自分の家族のニーズよりも優先しているほど献身的であるとわかり、心苦しくなりました。生まれたばかりのお子さまのためにもパプアニューギニアの熱帯雨林を守るべきでしょう。



▲準備してくださったのはゾンターク・ミラ教授でした



7月1日 浜松

## 遠州の森で、ポール・パボロさん、熱帯林の保護を呼びかける

NPO法人 雲を耕す会理事長 池谷 豁

浜松の街中にうっそうとした屋敷森がある。「パプアニューギニアの森を守る会」代表の辻垣正彦さんの実家である池川邸の森である。クスノキ、タブノキなどの照葉樹林が生い茂っている。かつて遠州の森は照葉樹林に覆われていた。遠州の照葉樹林は西日本へ、さらに雲南、ブータンへと広がっている。

森蔭でポール・パボロさんの話が始まった。熱帯雨林のパプアニューギニアと遠州は、あまりにも遠い。

浜松駅近くのアクトタワー（212メートル）から市街地を見渡せば、工業都市浜松の繁栄ぶりが手に取るようにわかる。しかし都市構造のなかに、熱帯雨林の資源が見え隠れる。「日本に住む人たちの快適さを追求するあまり、熱帯の森が奪われている」とパボロさんは訴える。

パプアの住民の合意もなく、先祖

代々暮らしてきた森の伐採を進められてきた。パボロさんの島にマレーシア系の伐採企業がやってきて、99年間の土地の賃貸契約を地主と結んだ。誰も伐採を認めていないのに、いつの間にか合法化され、ブルドーザーとチェーンソーで熱帯雨林をなぎ倒していった。そして熱帯雨林の木材が日本の建設現場や住宅に使われるようになる。

先祖代々受け継いできた森に暮らすだけで私たちは十分に幸せだった。森は住まいであり、食べ物の供給源であり、薬草は医療の役割を果たしてきた。なにより熱帯雨林は地球上の60%以上の酸素を供給している。地球の肺であることを何人が知っているだろうか。

パボロさんが先頭に立って抵抗した結果、一時操業



▲雲を耕す会の方々と池川邸の庭で



停止を勝ち取った。しかし実際に伐採がとまったのは昨年秋のことで、すでに6年で約40万本が切り出されていた。

外材が大量に輸入された結果、日本の林業は衰退の一途をたどってきた。天竜美林といわれた遠州の森林も荒廃してきたのは、そのような理由があった。このままでは100年後の子どもたちに豊かな森を手渡すことができない。そんな危機意識から発足した「雲を耕す会」としても、パプアの森から目を離すわけにはいかない。会場の人たちも、パプアの森を守ることは天竜美林の再生につながっているのだと知ることができた。

講演の終わった後、二胡の演奏があって、うっとりとしながらパプアの森を思った。バザーも開かれ、パプアの森を救おうと多くの支援の手が伸ばされた。終了後、パブロさんを囲んで集合写真を撮って、心の温まるのを感じながら家路についた。

7月2日 名古屋

## 名古屋中村教会での集会

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」名古屋支部 池田光司

7月2日（日）午後、名古屋中村教会にてポール・パボロさんを招いて集会が開かれました。名古屋中村教会は、森を守る会代表の辻垣が会堂の設計をして国産材で建てられた教会で、毎年森を守る会の集会が開かれています。そのせいもあり、教会に通っている方々を中心に15名ほどの小さな集会でしたが、ポールさんが話しをされた後、一歩踏み込んだ活発な質疑応答がなされました。

伐採により経済的、身体的および精神的なダメージでは説明し切れない、自身、家族、村が様々に分断される困難な状況に関する質問が印象に残りました。

ここでは、集会を全面的に支えていただいた中村教会牧師夫妻のポールさんを迎えた感想を紹介します。なお、「裸足でいると、大地とつながっている」というポールさんの言葉も印象に残りました。

### 岩本和則牧師

ポールさんをお迎えしての名古屋集会。現地に暮らす当事者の経験から知らされたのは、自然林の伐採に

より破壊されたのは自然のみならず、かつては自然と共生していた村の生活、家族のあり方が分断されている事実でした。大都市に暮らす私たちが払った犠牲を、いつの間にか自然と共に生きてきた人々にもより深刻なかたちで強制している事実が胸が痛みました。

### 岩本ひかり

やはり、人と人が実際に出会うのはすごいことだと思う。今までは遠くに感じていたパプアの森がポールさんと実際出会い、お話を聞くことでうんと近くに感じる事ができた。ポールさんが泊まった教会に来ていた小中学生たちもポールさんと挨拶を交わした。「パプアってどこ?」「どうして日本に来たの?」そういう出会いが未来を変えるって思う。



▲辻垣さんが国産材の伝統工法で建てた名古屋教会に「現地の大工を連れてきたい」と感動するポール・パボロさん



7月3日

## 京都散策

清水靖子

次の講演までの唯一の休みの日、京都を案内しました。

京都の寺社建築に深い関心を抱き、沢山の質問を私にしてきたポールさん。

その質問にポールさんのひたむきさを見ました。



▲コンクリートパネル（合板）にセメントを注ぐ工事現場の写真を撮るポールさん

「故郷の樹が合板になって使い捨てられる。そのビルは20年で壊され、また合板が使われる。村の皆に、この写真を見せたい」と語る。



▲美しい和服姿に目も向けず、社寺の建築と木組みに感動するポールさん

「日本人が古い寺社建築を千年以上も保存、活用している知恵は素晴らしい。でも、何で私たちの森の樹を伐っては使い捨ててしまうの？」

京都の旅で、私は彼から私自身の浅はかさを教えら



▲上賀茂神社の境内の小さな社の前で。その木組みと屋根の曲線美に惚れ込んだポールさん。「村での建築の参考にしたい」と語る

れた気がしました。彼の心の奥にいつも、樹と森があり、その思いはあまりにも深く、それを奪われた悲しみと絶望はあまりにも深く、反省しない日本人への言葉にならない思いが質問のなかからほとぼしり出ていました。

7月4日 広島

## 台風一過、暑い日差しの広島 観音町教会での講演会

山口裕子

ポール・パボロさんの活動への熱心な支援者、山口裕子さんがポールさんとの出会いを書いてくださいました。（清水）

台風3号の接近で、広島では朝から強い風雨でした。ポール・パボロさんを迎えに新幹線の広島駅に向かいました。ポールさんとは、「パプアの森を守る会」のニュースレターのおかげで初対面の感覚はなく、親しい人と過ごせた気分でした。デパートの11階の京料理店へお連れしました。簡単な昼食なのに、ポールさんはとても気に入ってくださったようでした。広い窓からの景色をさかんにカメラにおさめ、特に駅に進入する新幹線を高い位置から撮影されて、ご満悦のようでした。

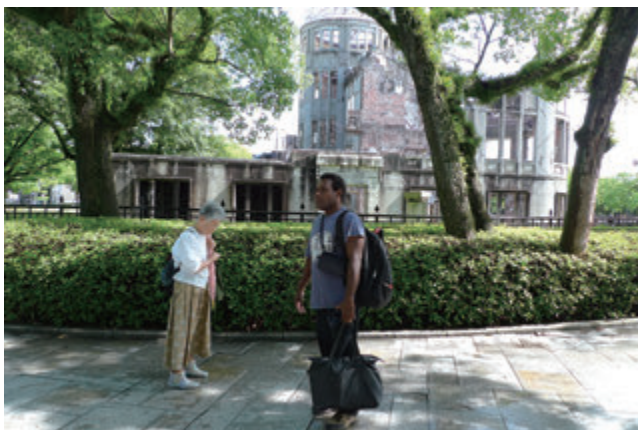
集会のある夕方までの時間、市内電車で“原爆ドーム前”までに行き、大勢の観光客に混じっての平和公園案内は、真夏の日ざしのなかでした。ポールさんは、どこでも撮影に夢中のようでした。



▲新幹線の見える窓際で山口裕子さんと



▲主催者の角山直子さん（清水の隣）と原発・核問題に  
長年取り組んでおられる方々



▲原爆ドームの前で、説明を聞いて呆然とするポールさん

早めに集会準備のために観音町教会に行きました。「広島名物のお好み焼き」を主催者の角山さんが用意してくださったのを、ポールさんは、とても喜んでおられました。

台風がそれたこともあり、集会には思いのほか多くの参加者が来られ、ポールさんの話を傾聴することができました。それぞれが、感銘と共感、そして責任感のようなものを抱いていたはずです。

（山口裕子さんは、ミクロネシアの海への日本政府による原発のゴミの海洋投棄反対運動への支援者でもありました。清水）

7月5日 岡山

## ポール・パボロさんとの出会い そして誓い

カトリック岡山教会平和共生委員会  
鈴木 實

ポールさんとの出会いは、長く、深く、流れ下る地下水が地表に顕れ出るのを望むようにして、不思議な巡り合わせの末、実現しました。

20年前岡山教会再建のとき、アジアへの罪責に応えることを信徒総会が決議し、10年前パプアニューギニアのマヌス島奥地の教会再建を知り、協力を始めました。資金は信者からすぐ集まりました。見ず知らず、さらに連絡の困難なジャングル奥地に縁をつないでくれたのが清水修道女でした。こちらから神父が彼女に付き添い数度訪ね、2017年2月、20年間の念願が叶えられました。その間に「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」の運動に触れ清水さんの講演会を持ち、新たに我が国の現在の罪責を認識しました。フィリピンの森を丸裸にして南下して行った日本の総合商社。現在は原木を輸入するのではなく、労働コストの安い中国へ持って行き合板にして日本へという、経済弱小国を痛めつける短期利益優先の巨悪システム、グローバルサプライチェーンが権力を振るう。そして政府や仲介者を取り込んで現地の人間の命を搾取している。最大の輸入国が我が国でした。

来日されたパボロさんに7月5日岡山へ寄っていただき、お話を開きました。

世界の最後の肺機能とも言われる熱帯雨林の宝庫が、政府・企業・仲介人の詐欺行為によって土地貸借の虚偽契約が交わされ、切り取られています。不法性



▲カトリック岡山教会にて集会後に



を西ニューブリテン州都キンベ裁判所に訴え一時操業停止命令を出させたにもかかわらず違法伐採は続き、企業側は首都ポートモレスビーで操業再開命令を出させています。しかしポールさんたちも首都での裁判へ向けて屈せず運動を続けています。

命を削る弾圧の日々、企業の武装団による暴力はエスカレートしているのに報道も政府も関与しない。世界の良識ある人々の広い支援で勇気を得ているとのこと。彼がお話中にそれとなくぬぐっておられた涙。

私たちは丁度、「ラウダート・シ」（共に暮らすみんなの星について、フランシスコ教皇回勅）の勉強中でした。回勅の核心は、「インテグラル（包括的）エコロジーは、いのちの尊厳・被造界の善の破壊に関して各々はばらばらではなく、すべてはつながっている」というビジョンと理解しました。

「ワイロを受け取らず、象に向かうアリのような非暴力抵抗を起こされているパブロさんの涙を私たちは決して忘れることはない」と一同誓いました。

連帯します。心身のご無事を祈ります。

7月6日 大阪

## 関西学院大学の階段教室で 大勢の学生に講演

山本俊正（関西学院大学教授）

アジア・太平洋問題・正義と平和・人権問題への研究と活動をしてこられた山本俊正教授による招待でした。（清水）

去る2017年7月6日、パプアニューギニアから来日されていたポール・パボロさん、および日本国内での活動に同伴されているカトリック教会・シスターの清水靖子さんを関西学院大学にお迎えしました。大学でのチャペルおよびキリスト教学の授業で講演をしていただきました。

パプアニューギニアの最後の熱帯雨林を生命がけで守っている、村人のリーダーであるポールさんの生の声を聞く貴重な機会となりました。

ポールさんが住むパプアニューギニアの森は村人を養い、水を与え、喜びを与え、村人にアイデンティティを与えてくれるものであることを知りました。しかし近年、それらの森が、村人の目の前で、破壊され、

引き裂かれ、滅多切りにされていることが、映像と共に紹介されました。

森が破壊されることは、村人の食物となる果物と木の実、薬、家をたてる木材が喪失することを意味しています。また森の破壊は、村人の伝統的な生活様式、培ってきた歴史と儀式の糧、小さいころ友だちや両親と一緒に聞いた様々な鳥たちの泣き声を、消し去ることであることも知りました。

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」が作成した統計資料によると、日本は熱帯材最大の消費国であるとのこと。半世紀以上もの間、熱帯材をアジア・パプアニューギニア・ソロモン諸島から輸入して、それを日本の合板工場で合板して、消費してきました。最近では中国で合板したものを輸入しているようです。私たちが無意識のうちに使用している合板材が、このような背景と森や土地の破壊を伴っている事実は、学生たちにも大きな驚きでした。

私たちの生活のあり方が問われる貴重でチャレンジングなお話しに感謝したいと思います。

また、私たち一人一人がポールさんたちの森を守る運動を、どのように支援できるか大きな課題が与えられた講演でした。

7月7日 大阪

## アジアでの熱帯雨林を守る活動で 有名な「ウータン・森と生活を考 える会」で講演会

西岡良夫、石崎雄一郎

七夕で賑わう大阪の梅田の中心街が会場でした。中心となって活動をしてこられた西岡良夫、石崎雄一郎さんに感想文をお願いしました。（清水）

### 西岡良夫

ポール・パボロさん、清水さん、素晴らしい話で、大阪での集会は盛り上がりました。とんでもないことです。森林伐採後、レンタルする場合、99年間も企業が使用するとは許し難いことです。

このアブラヤシ農園開発は近年、85%を占める輸出货量を誇るインドネシア、マレーシアにとどまらず、パプアニューギニア、ブラジル、ガイアナ、フィリピン

の聖域のパラワン島などで行われ、新たな乱開発が始まっている。とりわけ、パプアニューギニアやパラワン島、ガイアナでは、マレーシア、シンガポールの企業の進出が起きている。森林を破壊し、地元の人達の生活を破壊するアブラヤシ開発は、もういらない！

インドネシアのオランウータン保護センターも「これだけ企業が森林を破壊し、次なるアブラヤシ開発で多くのオランウータンは生息地を失い、乱開発で乾燥した土壌となり、火災も多発しやすくなっている。もうこれ以上のアブラヤシ開発や森林破壊はいらない！人間の生活様式を変えるべきだ！」と訴えている。

国連で2030年までに森林破壊ゼロにとのニューヨーク宣言が2015年になされた。しかし、推進するというブラジルなどでは有名無実化している。今、森林保護しないで、いつ実施するのか！

パボロさん、清水さん！今後も共に森林保護を！

## 石崎雄一郎

この度は、パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会のポール・パボロさんの講演を大阪でも開催いただきありがとうございました。ポール・パボロさんと清水靖子さんの熱く臨場感のある素晴らしい講演に胸を打たれました。



▲「ウータン・森と生活を考える会」の集会にて

思えば、僕が熱帯林の問題に関心を持ち、保護活動に参加し始めた時期に読んだのが、ブルーノ・マンサーの著書『熱帯雨林からの声—森に生きる民族の証言』と清水靖子さんの『日本が消したパプアニューギニアの森』でした。あ那时的の衝撃は今も思い出しますが、パプアニューギニアで実際に活動する方のお話を直接聞くことができたのはとてもうれしいことでした。

しかしながら、内容はうれしいものではなく、聞けば聞くほど酷い状況に心は痛み、怒りが燃え上がります。また問題だけではなく、当事者であるポール・パボロさんの活動家であり生活者である苦悩は推し測れません。ポール・パボロさんはお子さんが生まれたばかりと聞きましたが、コミュニティの中での生活を抱えながら、熱帯林保護活動を続けるのはいかにエネルギーのいることでしょうか。

生まれ育った故郷の問題に立ち向かわないといけないというのは、苦しいものです。僕も日本に暮らす自分が、ボルネオの現地でどのように関わられるかを常に問い続けています。そして問題の背景にある自分の暮らしについても…

私たちにできることはほんの一握りのことかもしれませんが、せめてこの問題を、つながりのある日本の消費者と共に考えていく姿勢は忘れたくないと思います。貴会のますますのご盛会をお祈りするとともに、皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

7月9日 東京

## ニコラ・バレ修道院報告会

倉川秀明

7月9日、ポールさんの来日中最後の報告会が、四谷にあるニコラ・バレ修道院で行われた。

日本の各地を回ってたくさんの報告会をこなし、彼を支えている多くの人々と出会って、ポールさんは終始晴れやかな表情だった。

ポールさんは、これまでの報告をしてから、日本の社会では多くの建物が建てられているが、そのために多くの合板が使われ、その材料としてパプアニューギニアから多くの木々が切られて持ち込まれている。日本の社会の在り方を考え直さなければならないと、私たちに提起した。



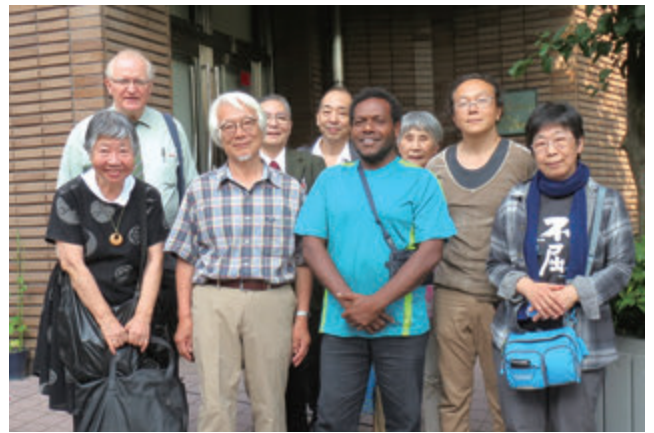
続いて、守る会の清水靖子は、パプアニューギニアおよびニューブリテン島の森林伐採について包括的な解説とポールさんたちの森を守る闘いの意義、そして現地の最新の情勢について報告を行った。

参加者の中のアイヌ民族の方から、民族の伝統や文化を守り抜く活動が、ポールさんたちの活動と共通する意味があって、共感を覚えるという力強い連帯の表明もあった。

ポールさんは、最後に立ち上がって、こう発言した。「今回日本のたくさんの方所に行きましたが、たくさんの方々が私を温かく迎えてくれ、こんなにたくさんの方々が私たちの森を守る活動を支援してくださっていることを知りました。私は、たとえ賄賂をさし出されても、決して受け取らないことを皆さんにお約束します。

子供たちのために、この森を完全に守り切るまで活動を続けていきます。皆さん、どうもありがとうございました」

会場は、割れんばかりの拍手に包まれたのだった。



▲報告会を終えて ニコラ・バレ修道院の前で

## ポール・パボロさんのポマタ地域の最新情報

清水靖子

ポール・パボロさんたちの尽力で、2016年末に伐採会社のギルフォード社は機材をポマタ地域などから引き上げた結果、伐採は行われていない。

しかし、SABL地域として99年間リースされているため、その土地を地主たちが自由に使用できない。そのためSABLリースの取り消しを含むポール・パボロさんたちの裁判が継続中である。

一方で、起訴状のファイルがニューブリテン島の州都のキンベの高等裁判所で紛失していたという出来事の発覚が昨年あり、ポールさんたちは、首都のポートモレスビーで新しい弁護士と共に、起訴状とその原本となるファイルを作成しなおし、再度最高裁判所に提出せねばならなかった。パプアニューギニアでは、SABL関係や伐採関係の、政治的・経済的な重要裁判では、裁判資料の紛失が頻繁に起こっているとのことであり、なぜだろうかと人々は首を傾げる。

最近のポールさんは、Facebookのコメントで次のように述べている。

「過去は取り戻せない。過去を恨んでも取り戻せない。未来は不明確である。だから最善を尽くして現在を生きよう」というダライ・ラマの言葉を引用していたものだ。

絶望の淵から立ち上がって、できることに挑戦している彼に、引き続き励ましと支援をお送りいただきたい。



▲手製製材木で村人の収入のために尽力するポール・パボロさん（ポールさんのフェイスブックから）

## 現地報告

2017年1月8日～22日

# ニューアイルランド島、ニューブリテン島ワイド湾への凸凹道中と調査日記

清水靖子

翻弄されたボートの旅あり、伐採企業宿舎に4泊しての見聞あり、森林認証制度と植林で名を売りながら天然林を伐っている日系企業の現状あり、川のワニをしとめた子どもたちの武勇伝あり。企業に拘束されても、森を守る抵抗をつづけるリーダーの涙にほろっとした日の記録等々を、皆さまにお届けします。



▲岡山教会の支援プロジェクトに加わっての旅  
(右端が主催者の後藤正志神父)

### 1月9日

ニューアイルランド島を上空から眺めながら、ケビアン空港に到着する。

ニューアイルランド島は（1万3000km<sup>2</sup>、12万の人口）、ナガイモを伸ばして横たわらせたような全長350キロメートルの細長い島である。北端に州都ケビアンがある。南東から北西に細長く延びている。2379メートルのタロン山ほか、中央の山岳地帯から大小の川が流れ出て浜辺の村々を潤す。海は森の恵みでマグロ、カツオ、さんご礁の魚の豊富な漁場であった。今は、その面影が変貌を遂げている。

同島の北西には、火山島ニューハノーバー島（1200km<sup>2</sup>、2万人の人口）が近接している。

ラバウルのあるニューブリテン島とは、飛行便が日々運行し、島の中央部からは海峡越えのポートでの往復が可能である。

久しぶりのニューアイルランド島であった。今回は岡山のカトリック教会の招待による現地ケビアン教区への支援プログラムへの同伴旅行であった。その機会を与えてくださった岡山教会と後藤正志神父に深く感謝を述べたい。

ニューアイルランド島については、自著で記してきた。

「ニューアイルランド島の幻のペンシルシダの物語」  
（『日本が消したパプアニューギニアの森』明石書店、1994年）

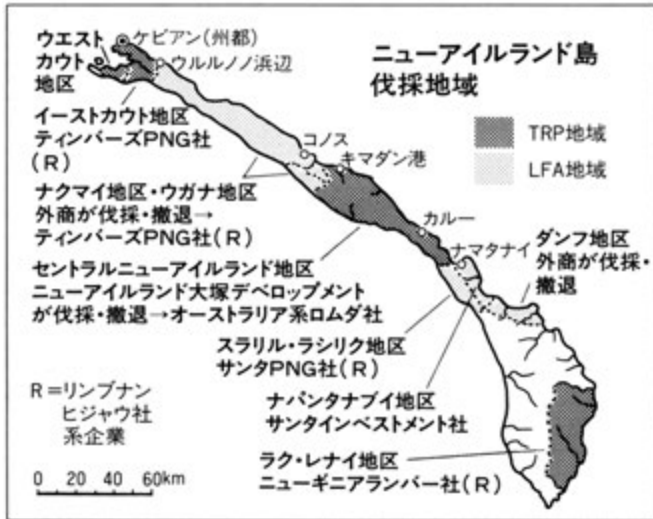
「戦争と島々の女たち」  
（『森と魚と激戦地』北斗出版、1997年）

日本企業（外商や大塚家具）は、1970年代から80年代初頭に問題操業で現地を追い出されるまで、同島で貴重な樹（ペンシルシダやクイラ）や合板材（カロフィルムやタウンなど）を伐採してきた。以後はマレーシアその他の企業が伐採、それを買い付け輸出する企業群（住友林業や山陽国策パルプほか）がニューアイルランド島に群がっている。

伐採後のオイル・パーム・プランテーション化は早い時期から進み、現在は山岳以外のほぼ全域がオイル・パーム・プランテーション化している。

一方で、ラバウルの後背地として日本軍による2年間以上の侵略・拷問・虐殺・レイプは残忍を極めた。スパイ活動を疑われた村人への殺戮が多かった。昔戦車、今ブルドーザー、知られざるニューアイルランド島について、上記の著作に記した。





▲1994年当時の伐採状況(『日本が消したパプアニューギニアの森』明石書店より)



## 1月10日

1000人を超える参加者で埋まったカトリック校生徒先生によるミサに、日本側の私たちは短いスピーチをした。私は、「戦争中の日本軍による侵略と、戦後の伐採による破壊」への謝罪をした。それを聴いた人々から多くの反応をいただいたことに感謝する。それによってインタビューの機会もいただいた。

午後は支援の書面をアンブロイズ司教に手渡す。



▲アンブロイズ司教と後藤神父

## 1月11日

今日は案内係のスティーブンさんの運転する車で、島の南へ大縦断をする日である。

まずは、海辺の土曜マーケットに行く。村人たちが思い思いのお店を広げている。私はその活気が好きだ。マングローブのカニあり、エビあり、珊瑚礁の魚あり、



▲海辺の土曜マーケット



タロイモ、野菜、ピートルナッツが、元気な声で売られていた。ココア栽培とコプラ生産がこれに加わる収入源として暮らしが営まれている。

「Yasuko！」という声に振り返ると、ステイーブンが顔を輝かせて言う。

「ジョン・アイニさんだよ。偶然出会えてよかった。島の森を守る指導者なのだよ。彼からたっぷり話を聞くといい」。私たちは握手をしながら明日の再会を約束する。

いよいよ縦断旅行を開始。走行距離何十キロ、いつまでもオイル・パームのプランテーションが続く。

川べりの谷間にほんの少し村々が姿を見せる。乾いた土壌、浅く濁った小川が繰り返し現れる。

途中、ラマコットという地域で車を降りて、オイル・パーム畑に分け入る。

小さな洞穴への道で、案内の人は説明する。

「戦争中に日本軍から逃れ、洞穴に隠れ殺された、外国人宣教師（1人の外国人神父と7人の修道女）の記念碑だ。村人たちは、食べ物を運んだ。そして匿ったために殺された人々もいた」

神父や修道女の話は語りつがれ記念碑まである。でもそれを助けて殺された民衆の話は、記念碑にもならない。他の地域でも、同様の出来事があった。

『森と魚と激戦地』を書いたときのインタビューでも同じことに気がついた。民衆の記録は、家族が語りつぐ以外に忘却のかなたに消えていく。

そう！ できることなら、『森と魚と激戦地』の更



▲オイル・パームの実（工場で絞ってやし油にする）



▲内陸までオイル・パームが覆う



▲古いオイル・パーム・プランテーションを裸地にし、再度苗を植えている（森のジェノサイド）





新版も含めて、村々と人々のことを記録に残しつづけよう。それを私の残る日々の遺言としたい。この日、私は心に誓った。

道はひたすら南につづき、いくつかの小川を渡る。流れを見るのはいつも気持ちがいい。

大きな川の河口では、樹にぶら下がっている子供がいた。小さな貝を集めた子ども、手で鳥の声をさせる少女もいた。その笑顔が素晴らしかった。子どもたちの肩や胸の筋肉の盛り上がりがかたくましく輝いていた。

途中で壊れた大きな橋があった。その脇に急ごしらえの土砂を盛った橋ができていた。私たちのワゴン車はいったん渡りかけたが、途中で引き返した。応急土木工事が危うかったので、満潮時となる帰りが心配だったからである。残念ながら、さらに南には行けなかった。

1月12日（日）

闘うリーダーのジョン・アイニさんにインタビュー  
「クイラの木を植えないと水も森も回復できない」

ケビアンから南へ車で20分ほどのところにあるカセロク村で、クイラの大樹が風と鳥を呼ぶ庭で話を聞く。

ジョン・アイニさんは、1964年生まれ。1980年代から漁業省に勤めながら、サンゴ礁と沿岸の魚の減少を憂慮し、海と海岸線を守る活動を開始した。

1993年にAilan Awarenessを組織し、海を守るSeacology（海の環境を守る）活動を展開する。

2007年からは、伐採企業とSABL（スペシャル・アグリカルチュラル・ビジネス・リース）に反対する活動を開始。

彼は現在ニューハノーバー島の行政長官である。しかしニューアイルランド島地域は、伐採企業と組んだジュリアス・チャン（元首相）の支配下にあり、その



▲盛り土の上に見えるのが私たちのワゴン車、右手が崩壊した橋





▲クイラの苗を人々に配りつづけるジョン・アイニさん



▲アイニさんの自宅。クイラの木が地下水を呼び、風を呼ぶ

政治と伐採企業の力はあまりにも強い。

2012年にSeacology(海の環境を守る)活動で受賞し、カリフォルニアのパークレーでスピーチをする。

2013年に、伐採反対活動で企業から訴えられ、6ヶ月間のいやがらせ拘束を受ける。「伐採機材を燃やし、マレーシア人を殺そうとした」との嫌疑と裁判であった。しかしついに6ヵ月後、裁判に勝ち釈放される。

2015年、Global Witnessなどの外国NGOとのネットワークで、ニューハノーバー島の伐採調査活動。ニューハノーバー島でのSABL地域の伐採を強行するリンブナン・ヒジャウ社への抗議集会と、村人への研修会

を繰り返す行方。

2016年、リンブナン・ヒジャウ社の道路工事を村人たちと閉鎖行動へ。SABL撤廃を求めて、ポートモレスビーに行き、首相と土地省と森林省に抗議の署名を提出した。

「政府は企業の言うなりで、私たちには何の返答もない」

「オイル・パームで覆われて、そのわずかの隙間に村人たちが貧しい暮らしを営んでいる。その現状がたまらなく悲しい」

「ニューハノーバー島では75%がSABL化地域にされ、土地も森も奪われてしまっているが、残る25%はまだ原生林が残っている。この森を守る闘いをしている」

「自分の力ではどうにもならない。自分自身が役立たず（useless）って感じる」

伐採をとめられない無力さに彼は涙ぐみ、私の前で泣いた。私も涙ぐむ。

彼の庭はクイラの大樹で囲まれていた。森の中にいる涼しさだった。

「クイラが海岸線を守り、岸辺を波の浸食から守ってくれる。地下水を呼んでくれる。欧米のNGOは、気候変動対策や海岸線を守るために“マングローブを



植える”と研修会などで我々に教える。冗談じゃない。岸辺にクイラのような大木がないと駄目なのだ。マングローブでは激しい風雨から海岸線を守れない。地下の根深く水を蓄えられない。侵食も防げない。彼らのキャンペーンに騙されるなど言いたい。もとは深い森があったから海岸が守られていた。海も守られていた。その森がないので海も守れない」

彼はクイラの苗木を私に見せてくれた。「こうしてクイラの苗木を育て人々に配っている。クイラを植えると海が守られる。そして地下水を呼ぶ。その樹の材は家の土台柱になる。この庭を訪問した人々は“なんて爽やかな涼しさなのだ”と言うのだよ」

私は彼の話に感動しつつ過ごした。現在4人の子どものお父さんである。

手作りの小屋風の二階建ての自宅も、研修用の小屋も趣があった。

波の音と、樹の上の鳥たちのさえずりは、揺りかごのように私たちを囲んで歌いつづけていた。

そうだ、彼の活動を日本に帰ったら知らせよう。

彼の活動を追った動画が以下に作成されているので紹介したい。

<https://www.youtube.com/watch?v=YK4ZGSxnqJs>

<https://www.youtube.com/watch?v=G6DKJIn4zVI>

この日の朝は、フィロメナ・ジョナさんにもインタビューした（海の見えるケビアンケビアンの丘にて）。

彼女の父は、日本軍によって、スパイ活動を疑われて、日本軍の船のマストに、カヌーごとクレーンで吊り上げられたほか、多々苦難を経験をした人である。ブナウ村（南部の村）での出来事だったという。いつの日か詳細を記したい。

## 1月13日 早朝

ニューブリテン島のワイド湾へ直行

ニューギニア航空でニューブリテン島のトクア空港に到着。後藤神父に深い感謝を述べて別れる。

ワイド湾の日系オープンベイ・ティンバー社の近況を見る可能性はないかと考えていた私だったが、「自分も同じワイド湾に行くので一緒に宿泊先を手配しておこう」というラバウルのフランチェスコ司教のあり

がたい提案があり、それに便乗させていただくことにした。こうしてワイド湾へ直行。「別々の目的の旅をして、その最初と最後は、宿舎で合流しよう」ということであった。

13日、予定通りトクア空港から、ラバウルの司教の運転する車に乗って、直ちに陸路を南下する。途中からスピードボートに乗り変えてワイド湾に向う。1月の波の状態は悪かった。ワイド湾に入ると激しい突風でボートは木の葉のように翻弄された。振り落とされないように、ボートのへりにしがみ着く。やっとの思いでワイド湾の中心地トルの浜辺に到着する。清水は陸地へ。司教は、「Yasukoと4日後に宿舎で合流しよう」と彼は手を振りつつ、ボートで遠ざかって行った。その後、彼に起こる事故を想像することもなく、「See you again」と言って別れる。

浜辺の広場で出会う人々と会話をしながら、待つこと2時間。

遅い午後、女たちをトラックに満載した女性が現れた。「あちこちで村の人たちを拾っていて遅くなったの。遅れてごめんなさい。私はTZEN社の女性共同体の係、フィリピン人のアニーです。あなたを宿舎にお連れします！」と満面の笑顔で自己紹介する。

アニーさんは古いトラックを“気性の荒い馬を乗りこなす騎手のように”運転する。凸凹の道路の埃を舞い上げ駆け登る。私たちは前後左右に大揺れとなる。宿舎への道は、見渡すかぎりTZEN社のオイル・パーム・プランテーションだった。やがて高台に、宿舎兼彼女の家が見えてきた。地元の女性や雇われ人たちが出入りしている。

次第に状況が判明してきたことだが、彼女はマレーシアの伐採企業、TZENニューギニー社の渉外・公報を担う重要な人物なのであった。オイル・パーム・プランテーションを拡大するためには、地元の人との折衝が重要になる。どのような交渉過程がなされたのかはわからないが、同社はワイド湾を拠点に、すでに奥地までの伐採とオイル・パーム・プランテーション操業を実現していた。

TZENニューギニー社は2006年に設立。2016年には2万ヘクタールの獲得を目指すとして資料は記す。関連工場として、TZEN プランテーション社のパーム油製造工

場（東ニューブリテンパーム油社の支部）がトル内陸部にある。

2016年の同社の丸太輸出は45347立方メートルであることも記録されている（政府 Timber Digest）。パーム油の輸出は年間2万トンとのこと。

知らなかった。かつてのワイド湾の面影はない。私は呆然とした。

村々の私の友人たちは、TZEN社のことを何と思っているのだろう。あのロン村のアルフォンスたちに会って聞いてみたい。強い意志で伐採をとめようとしていた村の共同体とアルフォンスの話しを…。

私は一人呟き嘆いた。「何で司教は伐採企業の人と親しいの?」「宿舎に泊まるほど仲がいいの?」疑問が多々沸いてくる。

私は単独で伐採企業の宿舎に泊まり、伐採調査をしなければならなくなった。何事も単刀直入がいい。私はアニーさんに願うことにした。「同じ日本人として、日本企業のオープンベイ・ティンバー社の現状の状況を村人側から知りたいのですが…」。彼女は簡単にOKしてくれた。それが1日目のプログラムとなった。その翌日は、「旧知のロン村の老人を訪ねたい」と申し出てOKだった。

最後の日は、ラバウルヘガゼル半島北部経由で戻る。彼女もスタッフも一緒という計画になった。

伐採企業の中から、伐採企業の状況を見る。まか不思議な旅がその日から始まったのだった。

## 2月14日

ワイド湾のトルに流れ込むメヴェロ川の奥地へ行く旅。

早朝、TZEN社の事務所に寄り、四輪駆動のワゴン車に乗り換える。

その車で、アニーさんやスタッフと、トル港に停泊している巨大運搬船を見に行く。まさにパーム油を積み込む作業の最中であった。内陸にあるパーム油工場からの油を運ぶたくさんのタンクローリーが、波止場で積み込みの順番待ちをしていた。

波止場で監督中の第2ポスに挨拶する。

「1回に5000トンの油を積む.年に4回積み出す」と。となると年2万トン積み出すことになる。丸太の山も並んでいた。「丸太輸出は年4万立方メートル。実際に伐るのはその倍くらい。中継地の丸太置き場に積ん

でおく」とのことだった。これは後ほど調べた Timber Digestの統計表とも合致していた。

その後、メヴェロ川沿いに、オープンベイ・ティンバー社の操業地へ向かう。

オープンベイ・ティンバー社は、かつては北岸のオープンベイ側と南岸のワイド湾側の両方に積出港を持ち、両方にまたがる伐採地で操業をしていた。北と南の両湾からの天然林の伐採丸太を輸出、その跡地に平地を中心にユーカリ植林をしていた。いまは南岸では操業せず、北側のオープンベイ地域のみで操業をしている。

私たちの車は、その南北を結ぶ道路を走った。途中に深い森はもはやなかった。伐りつくされている。道路際や山際に所々植えられたユーカリは、放置されていた。メヴェロ川を渡る橋のひとつに、「サブマリンプリッジ」というのがあった。オープンベイ・ティンバー社が造ったという。強度の高いコンクリートの橋に穴が開いていて流れをさばっていた。興味深い構造だった。

## アンゲウカ村にてオープンベイ・ティンバー社について聞き取りをする

中央の山岳地域の分水嶺近くに、アンゲウカ村があった。その谷底にはメヴェロ川の源流部分があった。

10人ほどの村人と、村の中央の一軒の家のベンチで話し合った。

中心人物はチャールス・レスリーさん。15年間オープンベイ・ティンバー社で働いてきた人（サーベイヤー兼セクレタリー）である。以下が彼の話である。

「40年間の操業で村には何の利益もなかった。森は伐られ、ユーカリ植林され、土地は痩せた。1971年から2004年の間、地主の私たちへの伐採権料（Royalty）はあまりにも少なかった。一人の人が全部族を代表して受け取って皆に分配したら、雀の涙になる。ワイド湾からこのアンゲウカ村側まで4部族が土地を持っているが、6ヵ月毎の伐採権料で私が受け取ったのは、10～12キナ程度。伐採権料をもらえない家族さえあった」

「オープンベイ・ティンバー社の橋の建設は伐採道路のためであって、それ以外の橋や道路は壊れても建





▲川べり皆伐のユーカリ植林。早魃の火災ゆえか、立ち枯れて放置されていた。放置されたユーカリはあちこちに見られた



▲伐採された丸太運搬車とすれ違う



▲オープンベイ・ティンバー社の建設した“サブマリン橋”

て直しをしない。洪水で壊れても補修をしない」

「オープンベイ・ティンバー社は、天然林も伐っているが、国内用に売っている。2004年の契約更新時に、天然林からの丸太輸出許可は出なかった。輸出は植林木からのみと限定された。植林地域も政府の土地が中心。それ以前はTRP (Timber Right Purchase) からの丸太伐採と輸出の権利を所有して、政府の土地と地主所有地の天然林を伐採して丸太輸出をしていた」

「現在オープンベイ・ティンバー社は、新しい植林ブロックを開くために、天然林を伐っている。植林木の輸出だけといっても、植林地を更新しつつ、また植林のために、天然林を伐り続けていることには変わりがない」

(注：2016年のTimber Digestによると、4万3000立方メートルの丸太輸出をしている)。

「ユーカリ植林地では除草剤・化学肥料・落葉成分

からのオイルのために、土地は痩せてしまっている」

最後に村の暮らしを聞いてみた。そのなかでワニの話が出てきたとたん、大人たちの顔はほころび、笑い と賑わいの場と化した。

「この私たちの村の裏の谷間の川には大ワニがいる。子どもたちなんか飲み込んでしまうほどのワニがね。ある日、川原で遊んでいる子どもたちの前に、一匹のワニが現れたってわけさ。子どもたちの話によると、猛然とワニに向かって、スピア(魚を突く銚)で目や腹を刺し、石を投げ、棒で叩いた。そしてついに殺した。呼ばれて行った私たちはたまげたね。ワニがあんまり大きかったから、上に運び上げられなかった。そこで、皮を剥いて肉を切ってバーベキューをした。それでも余ったので他の村人にも分けてあげたほどだった」

話を聞いているうちに、件の子どもたちがワニ皮を

担いできた。それを見て私もたまげた。まだ幼さの残っている子どもたちではないか。「勇敢だったのね!!」。客人たちにも言われて、はにかむ姿が魅力的だった。

日本企業が森を奪ってしまった村の、行く末を担っていく子どもたちの勇敢さから希望をもらったような気がした。忘れがたいひとときであった。



▲奥地の谷の“大ワニを仕留めた”子どもたちの笑顔♪

注：

### オープンベイ・ティンバー社について

晃和木材株式会社が1971年に設立。1973年に伐採権取得。当初は約18万ヘクタールの土地から約12万立方メートルを伐採する契約だった。その広大な土地の原生林伐採を行って丸太輸出。伐採後の一部ユーカリ植林を開始。2007年以後、住友銀行グループ傘下、住友林業が株式の100%を所有。2011年の同社ニュースリリースによると、8月現在1万3692ヘクタールの植林地で持続可能な山林事業を行い、1万1770ヘクタールでFSC (Forest Stewardship Council) の認証を取得したとのことである。植林木の輸出を行っている。2015年には、晃和木材株式会社は解散し、オープンベイ・ティンバー社は直接住友林業株式会社の海外事業本部下に移転した。輸出先はベトナムの合板工場、その他で、そこから欧米に家具などの製品として輸出を行っている。

### 日本のODA開発投融資をめぐる日本政府との癒着

オープンベイ・ティンバー社への1979年のJICAによる開発投融資約6億円によって同社の製材工場が建設された。1979年にはその製材工場は火災により焼失。保険金がJICAへの返済の一部に当てられた。以後製材工場は建てられることはなかった。約束のベニア工場・チップ工場も建てられることはなかった。パプアニューギニア政府の森林大臣は、オープンベイ・ティンバー社の操業を停止させるべきであると主張。オープンベイ・ティンバー社は「外交的な圧力」を使い、オープンベイ・

ティンバー社の操業停止は日本企業の投資もODAもやめにするとの「外交的な圧力」を使った。1980年には再度「オープンベイ林業開発」の名で6億7800万円を同社が受け、同社のためのユーカリ植林、道路、橋梁のインフラストラクチャーの開発に使用された。その結果、1983年に同社に伐採暫定許可が与えられ、操業が続けられることになった。日本のODAがこうして日本の伐採企業のために使われたのであった。

(宮内泰介・清水靖子共著「開発協力という名の熱帯雨林伐採」『ニッポンのODA』学陽書房より)

南岸に関しては、オープンベイ・ティンバー社に代わってTZENニューギニー社が進出し、操業を拡大している。

私は宿舎に戻って複雑な思いで夜を過ごした。

1月15日

### ロン村のアルフォンスとの再会の日

早朝に宿舎を出てメヴェロ川の河口に行く。中洲に小屋を建てて釣りをしている親子がいた。私たちを見ると魚を持ってこちら岸にカヌーでやってきた。アニーが魚を買う。「この川口にワニがいっぱいいるのよ。カヌーに乗って鮎での魚捕りや釣りは危険な作業なの」とのことだった。

お父さんの仕事を手伝って、幼い子どもがカヌーを岸に横付けする。運んできた大きなバラマンディは10キナもした。子どもたちのたくましさに、ここでも感動せずにはいられなかった。

その後、上流からメヴェロ川をトラックで横切る。橋が崩壊していたからである。2016年4月に半月間降りつづいた豪雨で、1年前にできた橋は土台のコンクリートがひん曲がっていた。

トラックで崖上の道を走りつづけること1時間。お目当てのロン村に着く。旧知のアルフォンスさんは、



▲メヴェロ川の河口で魚をとって暮らす父親を助ける幼い子どもたち



耳と目が不自由で腰も曲がっていたが、ソーラーパネルを庭に設置し、庭も生垣も、家の中も、綺麗に整えていた。その姿は、昔も今も彼は誇り高いメンゲンスルカウの首長としての威厳の人であった。(清水靖子著『森と魚と激戦地』北斗出版 1997年 42ページ)

私のことをしっかりと思い出して下さったことに感動する。彼の傍には、姪が付き添っていた。アニーさんのいないときに伐採問題について聞いてみた。

「誇り高いメンゲンスルカウ族の土地、私はこの土地を絶対伐採企業には渡さない」「ココアとコブラの収入で十分だ。それ以上いらない」

お土産にたくさんのバナナ、パパイヤ、ハイビカをいただいでしまう。

後に宿舎で働いているメンゲンスルカウ族の人も私に語る。

「メンゲンスルカウ族は伐採を許したことは一度もない。両隣のトモエ族とパイニング族は伐採を許してしまっているが」と胸を張る。



▲アルフォンスさん 74歳

## 1月16日 宿舎での最後の夕方

TZEN社のスタッフのフィリピン人たちのパーティーが宿舎であった。

合流するはずであった司教は現れない。間もなく「嵐の海でボートから陸に上がるときに司教が転落して大怪我を負った」というニュースが入る。何ということだ。私たちはトラックで大急ぎで浜辺に行く。司教は浜辺の家の中に横たわり、腫れ上がった足は見るも痛々しく、宿舎に戻れる状態ではなかった。

ワイド湾は、波が荒いから上陸時が危険だということを知っていたことがあるが、まさにその通りであった。

## 1月17日 ラバウルへ帰る日

オイル・パーム・プランテーションの苗床づくりを垣間見る。雇われた女たちが多数で作業していた。プラスチックのポットの中に土を入れる単純作業ではあるが、幼子を抱えた女性も多々いた。土は川の肥沃な土砂を運んできているとのこと。メヴェロ川の土が苗床用に削り取られる！ショックな話である。

事務所出発を待つ間、唐辛子の入った中華そばをご馳走になりつつ、同社の幹部の一人、ラ・ヒム・トゥさんから話を聞く。

「企業のための木材の供給地の開拓が私の役割だった。コンゴに派遣されたときは、戦乱に巻き込まれて逃げまどった。生命からがら飛行機に乗れたときには、二度と来るまいと思ったよ」

「マレーシアやインドネシアでは、土地問題で、政府の命令に反対したら翌日殺されて発見されるのをこの目で見た。その点、パプアニューギニアは平和だ。でも伐採権料を地主たちは、わけのわからない使い方や、自動車を買って使い終わってしまう。男はダメ。女性の方がしっかりしている」などと言う。

いよいよ出発。ラバウルへの急用があるスタッフたちだったから、猛スピードでのトラック旅行だった。内陸の暑さと砂塵と揺れに、さすがの私も悲鳴をあげる。シートベルトが肌に食い込む。その後、ガゼット半島の北の丘の上で小休止した。パイニング族が誇っていた深い森林地帯は伐りつくされ、砂漠のようになっていた。ここもマレーシアの企業が伐っていた。

ラバウルに着き、最後に深い礼を述べて皆と別れる。アニーさんたちは、重要な企画があるそうで、その準備に急ぎょラバウルへ戻ってきたのであった。

この4日間アニーさんの親身な親切には頭が下がる経験の連続でもあったが、同時に複雑な思いのうちに過ごした日々でもあった。

ラバウルにもどってから安心したのか、どっと疲れが出て、体調を崩してしまった私だった。

## 1月18～21日

ラバウルとポートモレスビーでは、事務処理と情報収集をする。思いがけない出来事の凸凹道中を振り返り、暮れなずむ飛行機の窓から、心沁みる夕暮れを眺めながら、この旅のすべての出会いと出来事に、深い感謝をささげた。

## 現地最新情報 コリンウッド湾の地主たちの成功事例

首都ポートモレスビーから東へ、3000メートル級の山々を越えた東海岸に、コリンウッド湾がある。原生林が残る広大な地域である。この地域でも過去何回となく、リンブナン・ヒジャウ社が伐採のために不法な攻略を繰り返してきた。

しかし、そのたびに地主共同体の固い結束と、ネットワークと、裁判で、伐採の魔手を追い返してきた。パプアニューギニアで誇る輝かしい民衆の歴史がある。パプアの森を守る会も、長年その地主たちと連携して活動してきた。皆さまにタパ（伝統的樹皮布）を買って支援していただいたこともある。現地から人を招いたこともある。

2014年には裁判に勝って不正なSABL（スペシャル・アグリカルチュラル・ビジネス・リース）契約を廃棄させた。

ところが昨年2016年、同じ伐採企業リンブナン・ヒジャウ社は、コリンウッド湾のワニゲラ地域に狙いをさだめ、ココア・プロジェクトと称し、森林大臣から極秘のうちに伐採権を獲得した。

企てが発覚したのは2017年の4月であった。地主たちは迅速な結束で、コリンウッド湾内外、首都を結ぶネットワークで抗議活動と情報収集をした。それは見事だった。森林大臣にも攻め寄った。抗議の手紙は森林大臣に提出され、森林大臣は、「私は伐採権を発行していない」と断言し、伐採権を破棄する約束をせざるを得なくなった。

今地主たちは、森林大臣からの解答待ちをしている。

その後、企業は動きをとめた（2017年12月15日に清水への現地からの情報による）。

私がここで特筆したいのは、結束とネットワークと抗議の速さである。中央の森林大臣に提出した文書への回答を求める速さである。もし他のSABL地域でもこの迅速さと結束で行動していたら、もっと早く決着がついていた可能性がある。

加えて、コリンウッド湾の共同体から学ぶのは、“自力収入”としての伝統的なタパの製作・販売があり、その自力のempowermentが、森を守る鍵となっていることを強調したい。

（清水靖子）

○SABL地域についての詳細の資料は、

<http://www.coi.gov.pg/documents/COI%20SABL/Numapo%20SABL%20Final%20Report.pdf>

[http://www.greenpeace.org/australia/PageFiles/441577/Up\\_For\\_Grabs.pdf](http://www.greenpeace.org/australia/PageFiles/441577/Up_For_Grabs.pdf)



### ◎年会費・カンパ受付

郵便振替口座 東京00100-1-614216 パプアの森  
2018年度（4月～3月）3000円  
よろしくお願ひいたします。

◎DVD 調査報告の動画 1200円（送料込み）  
を販売しております

ホームページ <http://www.pngforest.com/>

### パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会 ニューズレター『太平洋の森から』第39号

発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の  
森を守る会

〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206  
辻垣建築設計事務所内 電話03-3492-4245